2023年度自己評価

事業所名	わんぱくクラブ駒沢	世帯数	27世帯	職員数	13人
アンケート実施期間	2024/1/11～2024/2/2	回答数	17世帯	回答数	7人
		回答率	63.0%	回答率	53.8%

	工夫している点	課題	改善目標
環境・体制整備	・靴箱や荷物置きは、あえて場所を固定しないことで、子ども達が主体的に選べる環境を整えている。 ・園庭にすぐに出られる環境を整えている。 ・カームダウンルームを設け、てんかん発作・パニック等の非常時に使用している。 ・スタッフ年齢層は、20代～60代。様々な年齢のスタッフを配置することで、多様な関わりができる環境にある。日々の子ども:スタッフの割合を、2:1以上にし、手厚い支援体制を敷いている。 ・その日来所する子どもによって、遊具の配置を変えて、遊びやすい環境をつくるよう努めている。 ・室内でも体を動かして遊べるよう、マットやトランポリンなど、大型の遊具を設置している。 **＜今年度の取り組み＞** ・B室に遊具置き場をつくり、その日使いたい遊具をすぐにスタッフが出せるようにした。 ・活動の流れや、集団遊びのメニュー、班活動のメンバー一覧を毎日貼り替え、子ども達が視覚的に情報を得やすいようにした。	・利用者受け入れ拡大を可能とするための人員の確保が十分にできていない。 ・スタッフ全体の平均年齢が上昇傾向にある。 ・遊びがその場限りになりがち。継続性のある遊び、活動づくりをしたい。 また、遊びの中身が固定化しないよう、遊具を活かした遊びを展開する力を職員が身につけ、日々目的をもって実践していく必要がある。	・採用活動は、法人内の運営組織と連携して進める。職員体制と連動する形で、通所曜日を増やしたい家庭のニーズに応える。 ・学生のアルバイト雇用ができるよう、採用を工夫する。 ・打ち合わせ時に、その時々のブームの遊びを職員間で確認し、その日の遊びの計画の中に入れる。
業務改善	・保育後に、当日の振り返り会議（終礼）と、個人記録の記入時間を30分程度設け、スタッフ全体で当日の保育を総括したり、課題解決の検討を行ったりしている。 ・常勤職員で課題について共有し、改善策を考え、実行している。 ・週頭に職員会議（週のまとめ・月のまとめ）を行い、保育の振り返りを行っている。 **＜今年度の取り組み＞** ・終礼にて個別の子どもに焦点を当て、支援のあり方について検討する場を設けた。書籍を題材に検討することもあった。 ・送迎スタッフを増やし、職員が事務時間を削って送迎に出る機会を減らした。 ・法人内の他事業所職員が研修として駒沢の保育に1週間入る取り組みを複数回行った（他施設実習）。 ・基本的な業務のマニュアルを作成した。	・月の目標とまとめは、担当者を決めたが、計画的にできなかった月があった。 ・行事計画書について、フォーマットや作成指針などの取り決めがないため、担当者によって準備・計画の進め方にムラがあった。 ・送迎専従のスタッフに送迎を委託するため、人件費が上がってしまう。 ・他施設実習の受け入れ時、駒沢の保育の意図やあり方などに関して説明が足りなかった。	・月の目標とまとめは、次月スケジュールを作成する時点で日程を組む。 ・行事計画書の作成手順や各業務マニュアルを作成し、業務の標準化を進める。 ・保育と送迎の線引きは明確にしつつも、体制上、スタッフが添乗できる時は、調整段階で配置を工夫する。 ・他施設実習に入る前に、保育の意図や支援のあり方について十分に共有する。
適切な支援の提供	・終礼を、活動報告だけに留まらず、支援の方向性や課題を検討する場にしている。 ・表面的な行動面だけに着目した対応ではなく、背景にある児童の心の揺れ動きを捉えることを大事にしている。 **＜今年度の取り組み＞** ・新型コロナウイルスが5類に移行したことを受け、活動を少しずつ展開した。また、コロナ前に行っていた班活動を、9月から部分的に再開した。BBQや昼食づくりなど、従来大事にしてきた活動に取り組んだ。 ・感染防止対策は、来所時の検温など解除するものもあったが、スタッフのマスク着用の奨励は継続している。 ・職員は児童発達支援管理責任者研修などの外部研修に参加し、専門的知識をつけるよう努めた。	・地域交流は、夏の深小カレーまつりに町会からお声がけいただいたが、当日だったため、参加できなかった。次年度は前もってお知らせいただけるとのこと。 ・活動は、以前の形に完全には戻していない。コロナ禍で、新たに集団遊びを毎日行うようになったなど、活動の中身の変化があったため。また、集団活動のプログラムが多いので、余裕をもって自由遊びの片づけをするなど、進行を気を付ける必要がある。 ・おやつ作りも、まだ踏みきれていない。	・町会とは、小まめに連絡をとり、連携していく。 ・活動の組み方は、試行錯誤段階だが、基礎をしっかりと築き、スタッフ間で活動の意図や方向性について十分に共有する。その上で、活動のアレンジや展開について検討していく。 ・遊びや発達など、基礎的な内容を含めた学習会を開催する。 ・毎日でなく、非定期的にでも、おやつ作りをすることで、皆で食べるものを準備する楽しさや達成感を味わえるようにする。
関係機関や保護者との連携	・放課後連東京定例会に参加し、情勢や行政の動きを知ると共に、本事業所の活動や運営について現状共有した。 ・保護者へは、お迎え時や連絡帳を通して、当日の様子を伝えている。また、家庭や学校での様子を記入いただき、情報を共有している。 ・月が終わった後に、その月の個人記録集を配り、保護者と情報共有している。 ・おたよりを毎月1回発行し、実践の中身を伝えるようにしている。 **＜今年度の取り組み＞** ・夏休みには、4年ぶりに、保護者が1日体験スタッフとして参加できる機会を設けた。 ・個別児童の支援会議が非定期で開催され、複数回参加した。 ・自立支援協議会は、施設見学会に1度参加した。 ・世田谷区の通所児童事業所連絡会に参加した。事業所紹介をする機会をいただき、プレゼンテーションをおこなった。 ・東京ボランティアセンターの助成金団体部会の学習会に参加し、本事業所の活動内容等について、プレゼンテーションを行った。 ・保護者会を2学期に開催し、後の時間でランチ懇親会を飲食店で行った。	・学校主催の支援会議は、今年度はなかった。 ・学校公開は、申し込みできなかった。 ・自立支援協議会は、施設見学会以外は保育の時間帯に被るため、参加できなかった。 ・おたより等で掲載される子どもに偏りがあった。 ・夏休みの保育参加は、人数があまり多くなかった。働く保護者が以前より増えていることが一因として考えられる。	・支援会議は、例年、1年生については実施する学校もあるため、学校の方針を確認していきたい。 ・学校公開の日程を予め確認し、児童の様子を見られるようにする。 ・全ての子どもにスポットがあたるよう、記事の内容に留意する。 ・夏の保育参加は、引き続き継続し、参加することで得られることを保護者間でも共有できるように仕組みを考える。
保護者への説明責任等	・苦情内容の確認は即日に行い、職員間で共有している。 事故が生じた際は、法人で定めたマニュアルに則り、速やかに保護者に連絡し、状況報告を行う。 ・新規利用者については、契約開始時に、利用料金や、放デイの仕組み等について説明している。 **＜今年度の取り組み＞** ・おたよりにて、事業所としての動きや、次年度報酬改定の見込みについて触れた。 ・保護者会で、活動報告のみならず、運営状況も伝えるようにした。	・わんぱくを利用する際の細かい決め事が文面化されていないこともあり、新規利用者には、その都度伝えることがあった。	・わんぱくの利用について説明した手引きを作成したため、次年度利用者から運用していく。
非常時等の対応	・入会時や定期的に行うアレルギー・てんかん調査表に基づき、非常時 の対応について把握している。 ・災害備蓄品を置いている。定期的に点検し、年間で予算を決めて購入 している。 ・避難経路図を作成し、室内に掲示している。 ・法人内で作成した、「事故等緊急連絡網」「緊急時医療関係連絡先」を掲示している。 **＜今年度の取り組み＞** ・施設を管理する区の方針で、防犯カメラを設置した。 ・BCP（業務継続計画）と安全計画を作成した。 ・災害伝言ダイヤルの訓練を行った。	・避難訓練の計画と実施が十分に行えなかった。 ・外部からの侵入に対する措置が甘い。 ・災害伝言ダイヤルの練習の実施が不十分だった。実際に訓練に参加した保護者がどれぐらいいたか、確認できていなかった。	・計画を立て、年間予定に落とし込み、毎年の恒例行事の一環として取り組むようにする。 ・安全計画やBCPと併せて、日ごろのわんぱくの危機管理状況について保護者と共有する。